孤独な旅人

瑞希　祐作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
孤独な旅人

【Ｎコード】
Ｎ０５６５Ｇ

【作者名】
瑞希　祐作

【あらすじ】
貴重な週末、久々の独身生活を楽しもうと思っていた私を襲った悲劇とは？そしてどうなってしまうのか？

1．第一日目　朝（前書き）

全9回を予定。1週間おきにでも更新しようと思っています。

1．第一日目　朝

今朝はこの冬一番の冷え込みだった。初めて氷点下を記録したこの日、北からの強い寒気団の影響で未明から雪が降りはじめた。降り始めたと思ったらあっという間に勢いは強くなり、まるで吹雪のようにこの街を包みこんでいった。路面はいつの間にか白く厚くコートされ、もはやノーマルのタイヤでは走ることができなくなっていた。しばらくするとチェーンを巻いて走る車の音が、重くずんずんと街中を響き渡っていた。

そんな音で私は目が覚めた。

今日は土曜日であった。昨日の晩、会社の付き合いもあって夜遅くまで深酒をしてしまった。終電車の時間に気づいてあわてて乗ったタクシーも出発時間までに間に合わず、結局のりそこね、大枚１万円の自腹を切ってようやく自宅にたどり着いたのはもう二時過ぎであった。

時間はまだ朝の７時過ぎであった。雪のせいか、薄色のカーテンから入り込んでくる外の光がいつになく明るい気がした。ちょっと体を起こして見た。昨夜、家にたどり着いてほとんど何もせずベットにもぐりこんだようである。シャツとズボンがすぐ脇に脱ぎ散らかされていた。カーテンを開けると街はまぶしいくらいのホワイトスノーに包みこまれていた。私は妻の名前を読んでみた。

返事がない・・・。

そういえば昨日から妻は娘と冬休みを利用して彼女の実家に帰省していた。予定では確か火曜日頃に帰ってくるとか言っていたようなことを思い出す。いつもなら飲んだ場合どんなに遅く帰っても一言二言ぐずぐず言われるのだが、昨日はそういう人もいないということで、自分的についつい羽目をはずしてしまったのを思い出した。

「そうか、私にとっては久々の独身生活なんだ！」と昨日うきうきしていた自分がいたのに気がついて、思わず笑ってしまった。

でも次の瞬間、異変に気づいた。喉の調子が良くない・・・、いがいがする。
きっと昨日カラオケを歌いすぎたのかもしれないと一瞬思った。元々喉は丈夫なほうではなく、ちょっと無理をすればすぐここに炎症をおこしてしまうのだ。風邪・疲労・ストレスというあらゆる症状のなりはじめに私は喉をおかしくすることが度々であった。まあそういう意味では健康のバロメーターとも言えるが、一度こじらせてしまうと大変なことになり、その不快感に耐えられなくなってしまうのだ。
ちょっとした不安感に苛まれながらも、「何か冷たいものを・・・。」と思い、ベットから起き出した。
この週末は久々の一人暮らしである。好きなことに時間が使える。いつもだと仕事でくたくたになって迎える週末も、共働きということもありゆっくりはしてられない。できる家事の大半をできる限り土日にこなしてしまわなければならないのである。掃除・食事・アイロンは私の分担であった。その上育ち盛りの子供たちの面倒を見なければならない。夕方になるころにはくたくたを通りこして、へとへとになっているのであった。
本当に貴重な週末である。
私はパジャマに一枚羽織ってキッチンに向かった。冷蔵庫から牛乳を取り出すと一杯喉に通した。二日酔いの翌朝には、牛乳はかなり酔い覚ましに効くのである。
冷たい感じが上の方から下のほうに流れ落ちていくのがわかった。でもそれと同時につっかかりながら少し痛みが走る。冷たさで若干麻痺し緩和されているとは言え、やはり違和感を感じてしまうのである。一応念のためを思って喉スプレーをしてみた。
自分の部屋に戻ると、もう少し眠りたいのもあったのだが、貴重な週末にはそれなりの予定があるということを考えて、とりあえず起きることにした。Gパンとトレーナーに着替えると、パソコンをつけメールをチェックした。ここ数年、インターネットの発達によ

って、従来のペーパーベースから始終メールでのやりとりへと仕事の進め方が、社会全体で大きく変わりつつあった。今ではどこに居ようと仕事は追っかけてくる。恐ろしい時代になったものである。チェックしてみるとバンドメンバーからの連絡だけで特に急ぎなものはなかった。

「さあ、とりあえずすることをして、この貴重な休みをエンジョイしよう！」

私はまず掃除機をかけなきゃ、と思いつつパソコンデスクから重い腰を上げた。これから私に起きる悲劇にはまだ気づく余地もなかった。

1．第一日目　朝（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｇｏｏ．ｎｅ．ｊｐ／ａｌｆｏｒｄ／に私の別名のブログがありますので、良かったら見てください！

2．第一日目　昼

一通り掃除機をかけ終わると、私はコーヒーメーカーのスイッチを入れ、お気に入りのキリマンジャロを作り、残っていたクロワッサンと一緒にした簡単なブランチを食べた。

さて、今日の予定はというと、午後の一時過ぎから友人と映画を見に行くことになっていた。友人と言っても１６歳も年下の女の子である。絵理奈とは、とある縁がきっかけで、３年前に知り合った。それ以来のつきあいだが、妻はそれを知らない。別に知られてまずい関係にまでまだ至ってないので自分としては問題はないのだが、やはり少々気が引けるのも確かである。まああまり硬いことは考えず、たまには若い女の子とデートするのも、若さを保つには必要なことである。彼女からも久々に会いたいと言われていたので、今日がいいチャンスだと思い、前もって約束していたのだ。

まあこれも私にとっては貴重な時間の使い方のひとつであった。

時計を見るともう十二時前であった。少し早めに家を出て、懺悔半分の妻からの用事をすませてからいかなければならない。そうこうしているともう待ち合わせの時間に間に合わなくなってしまうと思い、準備を急いだ。

黒のズボンに白いセーター、その上にちょっと若向きな紺のジャケットを羽織ってみた。自分なりにお洒落を決め込んでみたつもりだったが・・・。鏡で見るとたいしたことはない。「まあ元々素材が悪いのだから、こんなものか。」と思いつつ、家を出た。

待ち合わせの場所はこの町の中心のＹ駅前広場であった。ここから十五分くらいの距離であったが、何せ市の中心部で渋滞もするし駐車場も少ない。そのためいつもやたらに時間がかかる。ここに車を入れなければならないことを考慮しなければならなかった。そのため早く出る必要があったのだ。

幸いなことに、先日スキーに行ったときに履き替えたスタッドレ

スタイヤがそのままだった。一般道は多少除雪されていたこともあり、この程度の雪であれば走るのには問題がなかった。車に飛び乗ると急いでエンジンをスタートさせた。

しかし、本当に寒い。汚い表現だが鼻水が流れてつららになってしまいそうな感じがした。車が温まるまでガチガチと震えながらひたすら長い時間を待った。しゃがれた喉から「早くしてくれよ・・・！」と今にも泣きそうな声が出そうである。やっと車が動けるようになるやいなや、私は出口へと滑り出した。

一般道に出ると、この雪のせいか交通量はかなり少なく感じられた。いつもほどスピードは出せなかったが、渋滞が全くなかったこともあり、目的地までは予想していたほど送れずにたどり着くことができた。外に出る人の数も少なかったのであろう。駐車場にもスムーズに入れた。万事予定通りとなった。

さて、妻からの野暮用をさっさと済ませると、少し時間があったのでコーヒーでも飲んで彼女を待つことにした。

喉の不快感はまだ取れなかった。いや、さっきの寒さのせいで少し悪くなったような気がする。

最近建物の中の暖房は過剰というくらいに効き過ぎている。その為湿気が全く無い。乾燥状態なのだ。そしてその影響がじわじわと私の喉に現れる。ちょっと辛い。のど飴でももってくればよかったと後悔した。

やがて時間になり、彼女との待ち合わせの場所へと向かった。茶色のコートに少し派手目の赤のミニスカートに黒のブーツとは、まるで私の格好を合わせる気がないようないでたちであった。まあどうしようもないくらいの年齢の開きがあるのだから仕方がないことではあったが・・・。確かに傍から見るとちょっと細めでかなり美人の部類に入るだろう。これで彼女がもう少し若かったら、兄弟というよりもむしろ親子の関係と人から見られたかもしれない。私もそれなりの格好をしていたので、ぎりぎりその線までには行かなかったと内心ほっとした。この関係、もうずっと微妙なままであり、

今後どう進むのかはよくわからない。私には妻もいるし、彼女とは歳もずっと離れている。ただ彼女か私に好意を抱いているのもまた事実であった。3年前のあの事件がなければきっと同じ時間を並行的に進んだ関係であり、決して交わらなかったであろう。今後のことはどうかわからないが、今はお互いが会いたいときに時間を作って映画を見たり、食事をしたりして時間が共有できれば私は満足であった。

この日は彼女が見たいというラブロマンスの映画を見てから、港近くの北欧料理店で食事をした。ちょっとムードのある店であったが、そんな雰囲気になるどころか、むしろ会話は日ごろのお互いの世間話に終始した。「最近の授業はつまらない。」と彼女が言えば、私も「仕事がいそがしくてなぁ・・・。」というため息話が出てくる。まるで単なるストレスの発散場所でしかなかった。

「ところで、祐一？　最近は例の教授の話は調べているの？」と彼女が聞いてきた。

元々彼女は出会った当初、「さん」付けで呼んでいたが、どうも自分でもしっくりこないことから、彼女には歳関係なく、タメ口で行こうと話しをした。まあこれも若さを維持するための秘訣だと自分でも思っている。まあオヤジくさいかもしれないが・・・。

彼女が言った例の教授というのは3年前の事件に深く関わった人物で、たいへん興味深い「隠された史実」の研究をしていた。不幸にして彼は多くを語らずに他界してしまったが、その時以来、私と友人連中でその「隠された史実」を調べているのではあったが、なかなか思うような事実は出てこなかったのである。

「私のほうはさっぱりだよ。でも来週今泉さんと一緒に食事をすることにしているんだ。その時にでも何かあれば君に伝えるよ。」

今泉というのはそれを調べている私の友人の一人であった。もちろん彼女も知っている人物である。

「そうなんだ・・・。じゃあ何か分かったら教えてね。二人だけの隠し事はダメよ！」　と彼女はにっこり笑いながらも、「絶対よ

！」とせまる感じで私に念を押した。
食事を終えてもまだ少し時間があったので、「歩こうか？」ということになった。妻とも最近したことのないデート気分を今私は絵理奈と楽しんでいた。このころには雪はもう止んでいたのだが、それでも寒さは厳しいままだった。それでは観覧車に乗ろうということになった。この街のシンボルともいえる観覧車できれいな夜景をみるのもなかなかおつなものだった。僅か十二分くらいのランデブーだが、ちょっと肩を寄り添いながらの空中散歩を二人は楽しんだ。
私的にはもう少し彼女と一緒にいたかったのだが、体の変調は少しずつ進んでいた。先ほどから強い寒気がするようになった。とりあえず家まで送って行く事にした。別れ際に彼女は優しいキスを求めてきた。私は唇ではなく、首筋に軽くそれをするとすぐに車に乗り込んだ。
自宅に戻ったのは九時すぎくらいであった。

3．第一日目　夜

先ほどからやたらと寒気がする。部屋の暖房を全開にしているのだが・・・、今ひとつ効き目がよくない。いや、自分でそう感じているだけかもしれない。

喉の具合もよくない。次第に痛みが増してくる。こんなことだったら昼間も喉スプレーを持参して行けばよかった。もはや後悔しても始まらない。気休めだが、まあしないよりもしたほうがましだろうと思い、今ここで喉にスプレーをしてみた。しかし朝とは比べ物にならないほどしみる・・・。

「これは、かなりやばい。」私はとっさに思った。

完全に風邪をひくパターンである。こういうときは早めに休むのが何よりもの得策である。

しかし・・・、今夜は妻も娘もいない。私だけの貴重な時間がある。このまま寝てしまうのは非常に惜しい。時間があったら見ようと思っていたＤＶＤソフトもある。ネットも妻のお小言も無く、心いくままやることができる。いつもなら忙しすぎてほとんどできないテレビゲームをする余裕すらある。このチャンスを逃したら、それこそきっとこれから先１年くらいはこんな瞬間こ出会えないかも知れない。

私は悩んだ。そして最後に出した答えは・・・、誘惑に負けた。

どうせ明日一日休みがあるのだし、今日少し無理をしたところで朝はゆっくり眠れる。それこそ一日中寝てもいられる。そう考えると気が楽になった。

一応風邪薬を出してきて口に含んだ。少し苦かったが、これからの楽しいひと時を考えて水と一緒に奥に流し込んだ。寒気を防ぐためにもう一枚暖かいカーディガンを羽織った。

「さて、何をしようか？」

私は棚にしまっておいたＤＶＤを取り出してきてプレイヤーにセ

ットすると、自慢のＡＶセットのスイッチをオンにした。大画面ＴＶと音響システムのコンビネーションにはかなりの自信を持っていた。体をソファーに委ねると、やがて映画ははじまった。全米でもかなりのヒットだったといわれていたアドベンチャー作品だった。そしてそれから2時間、私は画面から片時も目を離すことなく、また耳をよそに奪われることも無く、集中していたのであった。見終えたときの満足感はひたすら格別なものであった。

次にテレビゲームに手を延ばした。一年近くエンディングを迎えていなかったＲＰＧものがあった。そしてその攻略に入った。今までちょっとした時間だけではクリアできず、ついつい匙を投げてしまったゲームがこういうときにはさくさくと進む。タイミングと集中、それが人間にとっては大事なことなのかもしれない。いつもの余裕の無い自分なら、浮かばないアイデアもこういうときにはどんどんひらめくのである。そしてクリア。「やっぱり万事がこんなものか・・・。」と思ってしまう。何となく気が抜けてしまった。

もう結構遅い時間になってしまった。既に日付は変わっている。薬を飲んだにも関わらず、ちょっと気を緩めると寒気が襲ってくる。喉も意識すると痛い。「ネットで遊ぶのは明日にしよう。」と思い、メールだけチェックすることにした。パソコンを立ち上げると、やっぱりあれこれと気になる。「ちょっとだけ。」のつもりがずるずるとはまっていく。誰にでもあることだ。また私は誘惑にまけてしまった。体調が悪いと思いつつ、明日行くはずのネットの世界にあっさりと引きずり込まれてしまった。

時間は午前二時。ようやく私はベットにもぐりこんだ。直ぐに寒気と痛みを感じながらも、深い眠りに包まれていった。有意義な一日であったという満足感とともに・・・。

4. 第二日目　朝

朝、目が覚めた。もう既に九時を回っている。しかし体を起こす気にはなれなかった。

頭が妙に思い。寒気もする。どうやら完全に風邪をひいてしまったようだ。軋む体を無理にベットから起こしてみた。ふらふらする。かなりの熱があるようだ。私はそう考えながらも、立ち上がりガウンを羽織って今のほうへと歩いていった。

家の中は静まりかえっていた。誰もいない。私の歩くスリッパの音だけがぱたぱたと妙な響きを立てている。棚にしまっておいた体温計を取り出し、脇の下に挟んだ。それからやかんに水を入れて火にかけた。

しばらくすると体温計が機械音を放ち、測定の終わりを告げた。恐る恐る見ると熱は三十八度くらいであった。思ってた程ではなかったので少し安心した。とりあえずコーヒーとパンを口に入れた。何か食べないと薬ものめないからである。

一通り食べ終わると、前に医者からもらった薬を探して飲んだ。直ぐに効く筈もないのだが、心なしか体の中から熱が引いていくような気分になった。単なる気のせいであることは重々わかっていたのだが・・・。

「さて、今日は何をするよていだったかな？」ふと思った。

元々午後に少し伸びた髪の毛を切りに行く予定にしていた。その後バンドの連中と落ちあって、飲みながら打ち合わせをするつもりだった。でもこの状態では髪の毛を切ったらさらに悪化しそうである。何よりも担当のお姉さんに伝染しかねない可能性もある。体が軋むところを考えると、インフルエンザの可能性もある。とりあえず今日のところは予約をキャンセルをすることにした。バンドの連中にも後で侘びを入れて今日の会合は欠席させてもらわねばならないな、とも思った。この分だとたとえ夕方まで寝てたとしても完全

に回復には至らないだろう。
暖かい格好をしながらしばらくソファーに座っていた。やがて薬がちゃんと効いてきたようだ。今日は日曜日なので病院もやっていないし、そう考えれば私には「寝る」という選択肢しか残っていなかった。
自分の部屋に戻って、ベットにもぐりこんだ。
薬は効いてきたはずなのに、なかなか眠れなかった。そういえば最近結構忙しすぎたので、まだ気分が昂ぶっているからかもしれない。今自分は熱をだしてうなっているはずなのだが、こうしてのんびりすることも最近なかったな、と不思議な気持ちになった。家にいても会社にいても常にたくさんの出来事が次から次へと私を襲ってくる。時間に追いまくられっぱなしだった。こんな風にただ横になっているのは、何時以来であろう？
しばらくの間にいろいろなことが私の中を通り過ぎていった。妻のこと、娘のこと、絵理奈のこと、仕事のこと、バンドのこと等々。よぎる記憶は次第に過去に遡る。3年前の事件、妻との出会いや結婚、そして娘の誕生。さまざまなことが走馬灯のように流れていく。やがて私の記憶は学生時代のあの忌まわしき過去へと至るところで、意識は途絶えた。
私は深い眠りに落ちたのであった。

5．第二日目　昼

インターホンの音がさっきから何度もなっている。気がついてはいるのだが、ベッドから出たくはなかった。誰だかはわからないが無粋な奴だ、こんなときくらいそっとしておいて欲しいものだと思った。

やがてそのせきたてるような音もあきらめたように消えた。漸く安心したのも束の間、今度は家の電話がなりだした。「仕方ない・・・。」と思い、私はそれに出ることにした。

「もしもし？」としわがれた声で見えない相手に話しかけた。

「あ！あなた？」

妻の声であった。彼女の声はいつになく生き生きとしていた。それもそうであろう、普段は仕事と主婦の二役をこなし、忙殺された毎日を過ごしているのである。彼女にしてみても久しぶりの休日を実家で過ごしているわけで、これがうれしくないわけがない。

「昨日、大雪が降ったみたいだけど大丈夫？　特に変わったことは無いかしら？」

単なる状況確認の電話であった。私は風邪にやられた枯れ声で問題はないよ、と答えた。鼻がむずむずし、気になったので慌ててティッシュを手にした。

「どうしたの、その声？　風邪でもひいたの？」と気がついた彼女。

「うん、ちょっとね。でも心配ないよ。いつもと同じで喉を少しやられた程度だから・・・。」

「早く帰ったほうがいいかしら？」

そんな気は無いくせに、彼女はさらっと言った。まあ私が調子を悪くするときはかならずといっていいくらい喉を先にやられるのを知っていたので、それほど心配はしていなかったのであろう。それは話している声からもわかった。

「いいや、大丈夫だよ。いつものことだから。それよりそっちはどう？　楽しんでる？」
「うん、久々のお休みだからゆっくりさせてもらっているわ。あゆこもお父さんとお母さんにべったりで、遊んでもらっているわ・・・。向こうも久しぶりに孫に会えたのでうれしかったみたいよ・・・。」
「そうか、それはよかったね。こっちは大丈夫だから十分骨休みをしてくればいいよ。久々に家事とかしなくていいんだろうし・・・。」
「そうね、でも本当に平気なの？」　彼女は念を押すように言った。
「なぁに、少しおとなしくしていれば平気だよ。心配しなくていいから。こっちに戻ってくるのは火曜日だったよね？」
自分でも少し無理をしているのはわかっていたが、悟られないように元気感をアピールした。早く帰ってこられたら妻も娘も不満足だろうし、向こうのご両親もがっかりさせる。それにいくら風邪を引いているとはいえ、あと2日半もある束縛されない日々を楽しめなくなる。たとえ今は風邪をひいていても、すぐに治してやるぞ、と思いながら・・・。
「そう？　本当に平気・・・？　うん、まあわかったわ。あまり無理しないでよ！　そうそう棚のところにかりん酒があるから、それを飲んで暖かくしていなさいよ。変な気だして、外に飲みになんかいかないように・・・。それでなくてもいつも飲んだくれているんだから・・・。」
彼女はいつもそうだが、最後は自分が年上女房だということで、人を弟のように扱う、たしなめるような言い方をする。まあ、面倒を見てもらうのも悪い気はしないので、いつもそれに従ったふりをしているのだが・・・。
「気をつけてよ。あっ、あゆこが呼んでるわ、それじゃあね。」と言って、彼女は電話を切った。

受話器を戻すと、私の疲れは一気に倍増した。十分な睡眠をとっているはずであるが、朝から比べても事態の改善には至っていない。むしろ悪くなっているような気さえした。額の暑さはさらにヒートアップする一方で、これならお湯が沸くかもしれない、なんて寒い冗談も考えてみた。でも喉の痛みが私を現実に引き戻した。

私はもう一度ベットに入って眠ることにした。

6. 第二日目　夜

時間は夜の八時をまわったところだった。静まりかえった部屋の中をエアコンの音だけが響いていた。

妻から電話があった後もうひと眠りしたのだが、五時すぎになって喉が痛くてたまらず、それで目がさめたのだった。

体温計で熱を測ってみる。三十九度をはるかにこえていた。立とうとしてもふらふらしてバランスを維持することができなかった。これほどまでに風邪に冒されたことがいままであっただろうか？もはやはっきりとしゃべれないほど擦れた声で、バンドメンバーの南沢啓に電話をし、今日の打ち合わせをキャンセルさせてもらった。啓はその声を聞いて「鬼の霍乱か？　とりあえずゆっくりやすみなよ！」と言って笑っていたが、当の本人は笑い事ではなかった。

状況はどんどんと悪化して行った。もはやしゃべるのすら辛くてたまらない。飲み込む唾がまるで針のように喉元を突き刺していく。

薬を飲むために冷蔵庫にしまってあった残り物をレンジに入れて暖めた。意識が遠のこうとすると食べたり飲んだりするものが激痛を伴い、私を現実へと引き戻した。まさに針のむしろとはこのことである。もはや味わうこととは程遠い状態だった。苦行に耐えながらも最後のひとさじを終えると、薬と一緒につめたい水を一気に胃の中に押し流した。

もはや立っていることすらままならない状態になっていた。私はベットを這うようにしながら目ざした。

ベットにたどり着く、布団をかぶる、そして目をつぶって眠ろうとした。ところがなかなか眠りに落ちない。それもそのはずである。喉の痛みとひどい寒気が私を蹂躙していたからだ。おまけに昼過ぎから出始めた咳がこのころになると絶え間なく続くようになり、鼻の調子と相俟ってひどい状況になってしまった。咳き込むと本当に胃が口から飛び出すのではないか？　と思うほど苦しかった。

乾燥するのがよくないのだろうと思い、私は加湿器のスイッチを入れた。少しでも湿気をこの体に補給しようと思って・・・。

そして・・・、それから二時間、私は目に見えない苦しみと戦い続けた。静寂の中をエアコンと加湿器の音だけが鳴り響いている。やがて、私は思った。「どうもおかしい。一向に改善する気配がない。どうしてだろうか？　もしかして別の病気なのでは？」などと思ったりした。

もう一度熱を測ってみた。もうあとほんのわずかで四十度に達する。本当に大丈夫なのか？　と思うと、気が滅入っていった。

そういえば妻や娘は今何をしているのだろうか？　さっき空威張りをしたくせに、こんな状態になってくると本当に心細くなってくる。絵理奈は何をしているのだろう？　こんな時そばにいてくれたら、などとありもしないことを考える。

「私のそばに誰かいてほしい、いや誰でもいいからいてくれ！」と声にならない叫びを上げる。いろいろなことが頭をよぎる。本当であれば久々の独身生活を満喫していたはずである。

「なんでこんなことになってしまったのだろう？　日ごろの行いは最近よかったはずだ！　でもこうなるなんて・・・。これも風邪ではない何か悪い病気のせいなのだろうか？」

だんだん自分が自虐的な方向に入っていってしまうのがわかった。額に乗せたタオルもしばらくすると効き目が失せる。熱、咳、喉の苦しみのトリビュートが次から次へと悪魔のテーマを私の中で奏でる。私はただその演奏をこの身で受けとめるしかなかった。そしてその苦しみに耐えつつ、眠りに誘われるまでの時間をただひたすらすごさねばならなかった。

それから・・・私が眠りにつくまでにさらに二時間という気の遠くなるほどの時間が必要だった。

7．第二日目　深夜

気づいたとき、私はとある外国らしい町を歩いていた。町並みはどちらかというとヨーロッパ的なのだろうか？　あちこちの看板にいろいろな文字が書いてある。でもその文字はあまり見たことがないようなものだった。

「ここはどこだ？」とわかるはずもない自分に問いかけてみた。

でも何故か行く場所は決まっている。自分でわかっているのだ。石造りの町並みを抜けて、2ブロックほど行った先を左に曲がるのだ。そしてそこから三軒先に赤い色のタペストリーがぶら下がっている店があるのだ。そこで待ち合わせをしているのだ。

「誰との待ち合わせだったのだろう？」と改めて問いかけてみる。記憶がない。

はっきりとした目的、でも朧げな記憶。その二つが私の頭の中でめぐっているのだ。何度も何度も思い出しを反芻しながら、そこにたどり着くまでじっくりと考えてみた。自分がきちんと正装をしているところを見ると、大事な人に会いに行くのであろう・・・。

目的地にたどり着いた。店の名前は読めない。でも目印の赤いルーフが自分の目的地であることを確信させる。重厚な扉を静かに押し開ける。中はちょっと薄暗いが、とても高級感のあるたたずまいである。どこかで聞いたことのあるような音楽が店の中に流れている。

「いらっしゃいませ。」と店員が挨拶をしたように聞こえた。言葉は日本語でないのだが、それがそうであると妙に確信をした。ちょっと手を上げて挨拶をして、奥のほうに進んだ。直ぐに階下に下がる階段があり、それを私は下っていった。

降りて行くとアンティークな作りのホールになっていた。側面の上部はおちついたクリーム色に、下の部分は木製の板が敷き詰められている。あちこちにあるランプはほのかな薄明るさを演出するく

らいに抑えられており、それがそのレストランの深い落ち着きを演出していた。奥には丸いテーブルが七つか八つ、白いテーブルクロスの上にナプキンやグラス、前菜用のディッシュプレートがそろえられており、客の来るのを待っていた。

お客は・・・、奥のテーブルに一人女性がいる。白い帽子に赤いドレスを着た女性が座っているだけである。髪が長くて細身であることはわかった。でも帽子が邪魔をして顔は見えない。お客は彼女以外には誰もいない。彼女こそが自分の相手であることがわかっていた。

私はゆっくりとそのテーブルに近づき、「やぁ！」といいながら席についた。

「久しぶりね！」とうれしそうに彼女は言った。その懐かしい声は聞き覚えがあるはずなのだが、思い出せない。

「うん、そうだね！　君は元気だった？」彼女を思い出せない私は、取り繕うように尋ねた。

彼女は帽子をかぶったままだった。

私たちは二言三言よくあるお決まりの話をしているうちに、若いウェイトレスがやってきて、私たちのテーブルランプに火をともした。そしてディナーの準備を始めた。

まずワインらしきものが運ばれてくる。彼女が味見をする。「おいしいわ！」というと、私につがれたグラスを促す。少し口に含んでみるとワインみたいなのだが味わったことのないような豊熟な甘さがあふれてくる。次に料理が運ばれてくる。前菜そしてどこまでも透き通るような赤みのあるスープ。それらは今まで私が食べたことのない食材であった。でもこの味からすれば相当高価なものであろう。食べようと思っても年に一度お目にかかれるかどうかの代物である。

食事をしながら彼女と私は、最近のことを話した。彼女は今とあるこの町の西にある島で自分のおじいさんとその執事、そして自分の3人で暮らしていること。彼女のおじいさんが歴史学者でその手

伝いをしていること。今日の食事はずっと以前に私と約束をしてて楽しみにしていたこと、等々を話してくれた。
そしてしばらくして運ばれてきたメインの肉料理なのだが、超一級品の牛肉よりもさらに柔らかくそれでいて味わいがある。まるで歯ごたえを感じた瞬間に口の中で溶けていくのだ。まさに肉を構成しているその分子一つ一つがパーッと口の中に広がってく感じがする。まるでこの世の贅を尽くしたような食事である。
私はずいぶん前に結婚したこと、娘ができたこと。そして今の会社でまあまあうまくやっているけど面白くないので、もっぱらバンドに夢中になっていること。本当のここしばらくの報告を彼女にした。
でも、私には彼女が誰だか思い出せなかい。彼女は相変わらずつばの大きな白い帽子をはずそうとしない。左の目元、鼻や唇は見えるのだが、全体が見えない。何か奥にひっかかっている。
「誰？　誰なんだろう・・・？」ただその思いがどんどんと果てしなく広がるだけである。
それでもぎこちない会話は続いていくのであった。
しばらくして、彼女はスプーンとフォークをそばに置くと突然口元に手をやりながらくすくす笑い出した。何がおかしいのかを私は尋ねてみた。
「まだ私のこと思い出せないの？　アキヅキ・ユウサクくん！」
私はその言葉にギクリとした。ずっと昔に捨てたはずの名前をなぜ彼女が知っているのだ・・・？　たったその一言で、一気に体中の汗が噴出してくるような気がした。動揺を隠せない。どうして、どうしてなんだ・・・？
彼女はそんな私を尻目に、くすくす笑い続けながら言った。
「私よ、スゥーよ。スゥシェールよ。あなたの昔の恋人だった人。そして・・・、あなたを殺した人。今日はあなたの天国への送別会なのよ。奥さんには悪いけど、あなたは今日ここで死ぬのよ。」
私の気は完全に動転している。彼女は言葉を続ける。

「でも心配しないで、今度は私も一緒に行くから。それとも私とでは不満かしら？」

そう言うと彼女は今まで被っていた帽子を静かに取った。唖然とする私の前にはまぎれもないあのころの彼女が屈託のない笑顔で微笑んでいたのだ。

「スゥーなのか？本当に？」そう叫んだ瞬間、私たちをとりまいていた周りの景色が全く違う世界ものへと変わっていく。タイムスリップ・空間移動する映画のシーンが変わるように急激なスピードで・・・。私たちだけをその中心に取り残して・・・。

瞬時にして変わった風景はあの学生時代に起こった忌まわしき事件のその場所だった。そして彼女は私の目の前に立っている。あの日と全く同じ場所で、同じ格好で・・・。彼女の様子は虚ろだ。それもあの日と同じ。そして手には古く鈍く光るものが握られている。

彼女がつぶやく。ただ、それは彼女の意思とはまた違う別のものだ。

「あなたは、あってはならない存在なの。この世の秩序の為、そしてこの世がこのまま続いていくために・・・。」

「スゥー、いったい何だって言うんだ？　しっかりしろよ！」

「私たちの運命はずっと昔から導かれてきたもの。そしてこれからも導かれ続けられなければいけないものなの。でもあなたの存在はそれをすべて否定するもの。このまま行けばいつか主メビリウスと対峙することになる。それはすべての過去・現在・未来への輪廻からの解脱を不可能にすることを意味するのよ。」

そうだ、あの時も彼女は確かにそう言ったのだ。あの忌まわしい時と同じことが目の前で起きているのだ。

スゥーは確かに私の彼女だった。普通の子と比べるとちょっと背が高く、髪が長い細身のきれいな女性だった。彼女は韓国からの留学生だった。初めてあったときはその美人さが故にお高くとまっているやつかと思った。つんとしているところが近寄りがたさを醸し出していたのだが、実際は違った。本当は単に内気なだけで、打ち

解けてみると実はおちゃめで明るい女性だった。そのギャップは相当なものだった。
ひょうなことから私たちは知り合い、お互いに持っていた悩みを話すうちに次第に好意が芽生えた。そして距離が近づき、やがて付き合うようになったのだ。そうだ、あの時も私達の研究室の調査に心配だからといって無理やりついてきたのだった。親父がその研究室の教授だったのをいいことに彼女がごり押ししたのである。研究室の連中のアイドル的存在でもあったものだから誰も拒むことをしなかった。みんなにうらやましがられるそんな彼女が私の自慢でもあったのだ。もしあの時是が非でもついてくるのを止めさせていればあんなことにならなかったのだ。
そんな彼女が今私の目の前にロンギヌアスの剣を持って立っているのだ。次に起こることが私にはわかっているのだ。
必死に正気に戻るように説得する。声をからして叫ぶ。彼女を現実に引き戻そうと必死になる。でも無駄であった。
彼女は何か言っている。私には聞こえない。この後何が起きるのかを私は知っている。彼女が突っ込んでくる。私はよけられない。そしてあの結末になるのだ・・・。
「止めてくれ、こっちに来てはだめだ。」あの忌まわしきことをおこさない為に、私は泣きながら叫び続けた。
でも夢でも変わらなかった。彼女がゆっくりとスローモーションでも見ているかのように、こっちに突っ込んでくる。私の目の前を白い何かがふわっと包み込んだ・・・。
そして・・・、私は悪夢という旅から帰還したのだった。

8．第三日目　朝

気がつくと朝になっていた。窓の隙間からわずかに陽が差し込んでいる。

「生きてる・・・。何だ、夢だったのか・・・。でも良かった。」

さっき見た夢があまりにも生々しかっただけに、自分が生きて目が覚めたことで妙にほっとした気持ちになった。

しかしながら熱を測ってみると、まだ四十度近くある。あれだけヘビーな夢を見て体が改善されるはずもない。むしろ命があっただけましだったと考えると、妙に自分が納得できたのであった。

「でもあの夢は何だったのだろうか？」私は夢の中でのスゥーとのやり取りを思い出していた。しばらくいろいろと思いをめぐらしていたのだが、私は考えるのを止めた。考えたところで昔のつらいことを思い出すだけである。とりあえずまずは自分の体を治してからにしようと思った。

ところがベッドから起き上がろうとしてみるのだが力が入らない。自分の体が思う通りに動いてくれないのだ。熱・咳・喉の痛みは体が眠りから目覚めるにしたがって、昨晩と同じように、いやそれ以上に私を苛み始めるのであった。

こうした状況になると、「もしかしたら昨日の夢は予知夢なのか？」とも考えてしまった。昔からそういう第六感に近いものは他の誰よりも敏感であった。だからそう考えても不思議ではない。そう思えば思うほど不安になる。熱いはずの体に、冷や汗がにじみ、滴り始める。「これは結構まずい。」と思うまでに時間はさほどかからなかった。

時計を見るともう九時になろうとしている。これだけ自分はピンチなのに、今日は月曜日だから会社に行かなければならない日だと考えてしまう。これも長年の繰り返しのせいなのだろうか？とりあえず薬を飲んで連絡をしないと、みんなが心配する。その対応もし

なければならなかった。
　さっきから必死に起き上がろうとしている。でも関節の節々は油の切れた歯車のようにぎしぎしというだけであった。なかなか動かない。それでもようやくベットから立ち上がる。体が自分のものかと思えるほどふらふらする。しかし何とかリビングにたどりつかなければならない。こんなことだったら薬と携帯電話を枕元にもってきておくべきだったと後悔した。
　普段は歩くことなど全く造作ないこのほんのわずかな距離なのに、たどり着くまでに気の遠くなるような時間を要する。いや、そう感じられた。この一歩、その一歩を踏み出すたびに苦痛が伴う。熱い。喉が渇く、ひりひりする。まさに私は今砂漠の中で朦朧とオアシスを探す孤独な旅人と化しているのであった。
　たったわずか数秒の旅が、目的地にたどり着くまでに幾千万の秒数がかかったような気がした。それでも何とか気力を振り絞り、私はそこまでようやくたどり着いた。
　声が出ない自分の喉をまず潤すために、蛇口を開く。コップにあふれるばかりの水が湧き出したとき、私は「彼女」の姿を見た。
「ユウサク、お迎えに来たわ・・・。今度はもう離さないから・・・。」スゥーは哀しそうに微笑みながら私に近寄ってくる。
　その瞬間、体中を激しい激痛が走った。耐え切れずその場にひざまずく。私はテーブルにしがみつこうとしたが、さらに第二撃が私の頭を襲った。
「ほら、行くわよ・・・。」と彼女は私の手を握り締めた。
　ほんのわずかな時間に私の人生が走馬灯のように映っては消え、消えては映った。私はそのときはっきりと悟った。これが死んでいくということなのだと・・・。
　彼女が夢の中で言ったことは本当だったのだ。あれは正夢だったのだ。
　妻や幼い娘、そして仲間を残して死んでいく私をみんなはゆるしてくれるのだろうか？　明日の新聞には「サラリーマンの孤独な死」

という見出しで乗るのだろうか？　絵理奈は悲しんでくれるのだろうか？

いろいろな思いと未練はオアシスの水のように、私の中にあふれ出でくる。そしてそれはいつしか蜃気楼のように私の意識とともに消えていった。

そして・・・、一人の男は床に倒れた。

「スゥー、これで君と一緒になれるんだね・・・。あの世で・・・。」

9．エピローグ

誰かが私の体を揺すっている。意識はあるのだが、全く何も見えない。

私は死んだのだ。そしてこれからあの世に行くのだ。そしてきっと彼女のところに導かれるのだ。それが自然の流れなのだ。だからきっと今体を揺らしているのも彼女だろう。目が覚めれば、そこには彼女のあのやさしい顔があるのだ・・・。

下界を去る時に、未練は消えてしまうのだ、と誰かが言っていたような記憶がある。私もそうなってしまうのであろうか？　今はまだ未練がある。まだ仕方のないことかもしれない。

そうしているうちに次第に周りが明るくなっていく。ようやく私の未来は始まろうとしているのだ。そして・・・、私は目覚めた。

「あなた・・・、祐一・・・、もう起きなさいったら・・・。」

目を開けるとそこには「彼女」ではなく、「妻」の顔があった。私は何が起こったのかさっぱりわからなかった。

「あれ？　死んだんじゃ・・・、なかったのか？　あれ、お前、どうしてここにいるの？」

すべての事態が全く飲み込めていない私の口から唯一この時出せた明瞭な言葉がこれだった。妻は何をわけのわからないことを言っているのか、といった感じで私のことをずっと睨み続けている。

「いい加減世迷言を言うのはやめたほうがいいわよ・・・。あなたが風邪をひいたって言ったでしょ？　電話の声の具合も普段よりずっと変だったから、心配して一日予定を繰り上げて帰ってきたのよ。そうしたら、あなたの会社の人がマンションの前にいるじゃない？　びっくりしちゃったわよ！」

妻は少々怒り加減で話を続けた。

「話を聞いたら、『だんなさんが会社に来ていない。普段そういうところだけはしっかりしているのに無断欠勤なんて考えられない。

携帯や家に電話しても誰も出ない。これは何かあったんじゃないか？』って話になったらしく、様子を見にきたらしいのよ。それであわてて部屋を空けてみたら、あなたがリビングのところでばったり倒れているじゃない？　これは大変って大騒ぎになったのよ！」

「へっ？」私は相変わらず何がなんだかさっぱりわからなかった。

「最初は本当に死んでるんじゃないかって思ったわよ・・・。でも息もあるし脈もあるし・・・。辛そうな息している割には変な顔しているし・・・。それで大急ぎでお医者さん呼んで見てもらったの。そしたら、インフルエンザと脱水症状を起こしているから直ぐに病院に連れていかなくちゃってことになったのよ。」

私は少しずつではあるがようやく事情が飲み込めてきた。まあとにかくどうやら死んではいないらしい。

「お医者さんに怒られたわよ！　熱があるんだったら水分をどうしてしっかりとらせなかったのか？　こんな病人ほったらかしてどうするんだって！　散々言われたわ・・・。いったいあなたはこんな体で何をしていたの？」と、妻は医者に怒られた分に更に自分の分も加えて、私にぶつけてきた。かなりおかんむりである。

「生きているのか？　そっかぁ、あれは夢だったんだ・・・。ははは・・・良かった。」と私はとりあえず自分の生還を喜んだ。

「よかったじゃないわよ！　あなた今日は何曜日かわかってるの？　火曜日よ！　火曜日。昨日病院に連れ込んで点滴や薬を入れてもらったら、直ぐに熱が下がったのよ。そうしたら今度は大いびきをかきはじめたの。うるさいったらありゃしない！　あんなにびっくりして、あわてさせられて、苦労して・・・。それでそんなに気楽な顔していびきかいて寝られたら、こっちはもう頭にきちゃうじゃない？」

このダメ押しが効いた。もはやこの状態では彼女としては収まりがつかないらしい。こうなるとしばらく彼女のご機嫌が戻るまで私は単純に「うんうん・・・、そうだなぁ・・・。」とうなづき続けるしかないのだ。

要は私はただのインフルエンザをこじらせただけであったのだ。今年のものは例年になく特殊で、何日にも渡って高熱が続くものだそうだ。だから十分に栄養と水分を補給しなければならなかったのだ。それなのに私は自分の時間を満喫することだけを考えて、たいしたものも食べず、水分も取らず、おまけに寝室の暖房をガンガンかけまくっていたのだから脱水症状を起こすのは当然のことだった。昨日の午前中、私が息絶えた後、昼過ぎに彼女とうちの同僚が私を発見し、適切な処置をしてくれたおかげで、私はあの世への「孤独な旅人」にならなくてすんだのであった。

まあ確かに死んだ人間が簡単に復活して、大いびきをかいて寝ていたら、救ったほうは最初は「良かった～！」と思っても、時間が経つにつれて怒りが沸いてくるのも当然であろう。まあ、彼らがいなかったら、私は本当に死んでいたのかもしれなかったのだろうし・・・。

全てがようやくわかった時、私は無性に可笑しくなり一人吹き出してしまった。妻はそれを見て、今度こそ本当に気が狂ったのかもしれない？　と思ったかもしれない。私は彼女の顔を見て、感謝の言葉と併せて言った。

「生きているのって本当にすばらしいことだね！　それを改めて実感してしまったよ！」

妻は私のそばで、唖然としていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0565g/

孤独な旅人

2010年10月11日01時55分発行